

博士論文（要約）

論文題目 植民地朝鮮における在朝鮮日本人の音楽活動

—中等音楽教員・音楽家の活動からみた韓国西洋音楽受容史の一側面—

氏 名 金 志 善

目 次

序章

- 1) 問題提起及び研究目的…………… (1)
- 2) 研究内容及び研究構成…………… (5)

第1章 植民地朝鮮における西洋音楽の受容過程

- 第1節 賛美歌…………… (8)
- 第2節 初期西洋音楽機関…………… (9)
- 第3節 音楽専門機関：梨花女子専門学校音楽科…………… (12)
- 第4節 日本の音楽学校に留学した朝鮮人…………… (18)
 - 1) 日本への留学…………… (18)
 - 2) 日本における音楽専門教育機関…………… (19)
 - 3) 日本の音楽学校に留学経験を持つ朝鮮人音楽家…………… (20)
- 小結…………… (24)

第2章 植民地朝鮮における日本人音楽家と東京音楽学校

一『近代日本音楽年鑑』と『東京音楽学校一覧』の分析を中心として一

- 第1節 『近代日本音楽年鑑』と『東京音楽学校一覧』にみえる在朝鮮日本人音楽家とその音楽活動の動向…………… (26)
 - 1) 『近代日本音楽年鑑』にみえる在朝鮮日本人音楽家…………… (26)
 - 2) 『東京音楽学校一覧』にみえる在朝鮮日本人音楽家…………… (29)
 - 3) 両文献からわかる日本人音楽家の音楽活動の動向…………… (30)
- 第2節 東京音楽学校の機能と役割…………… (35)
 - 1) 東京音楽学校の設立経緯とカリキュラム…………… (35)
 - ①東京音楽学校の設立経緯…………… (35)
 - ②東京音楽学校のカリキュラム…………… (37)
 - 2) 東京音楽学校卒業生とその進路…………… (41)
 - 3) 東京音楽学校卒業生の進路事例と中等音楽教員…………… (45)
- 小結…………… (53)

第3章 植民地朝鮮における音楽教育政策と音楽教育関連教科書

第1節	植民地朝鮮における教育政策	(57)
第2節	植民地朝鮮における音楽教育政策	(60)
1)	1906年9月から1911年10月までの唱歌・音楽教育	(64)
2)	1911年11月から1922年3月までの唱歌・音楽教育	(67)
3)	1922年4月から1938年3月までの唱歌・音楽教育	(69)
4)	1938年4月から1941年3月までの唱歌・音楽教育	(72)
5)	1941年4月から1945年8月までの唱歌・音楽教育	(75)
第3節	植民地朝鮮における唱歌・音楽教育関連図書	(82)
小結		(93)

第4章 植民地朝鮮における唱歌・音楽教育の実態

第1節	『文教の朝鮮』と『朝鮮の教育研究』における唱歌・音楽教育関連記事	(95)
1)	『文教の朝鮮』と『朝鮮の教育研究』	(96)
2)	両雑誌の唱歌・音楽教育関連記事	(97)
3)	両雑誌の唱歌・音楽教育関連記事執筆者	(98)
第2節	両雑誌記事に現れた初等教育における唱歌・音楽教育の実態	(102)
1)	小形勝「普通学校唱歌教授の苦い体験」	(103)
2)	安藤芳亮「音楽教育の根本問題と其の実際」	(105)
3)	安文英「低学年に於ける私の唱歌科指導の新方向」	(106)
第3節	1930年代後半から1940年代に初等教育を受けた証言者のインタビューと当時の学習ノート	(108)
小結		(111)

第5章 植民地朝鮮における師範学校音楽教員の活動

第1節	植民地朝鮮における師範学校音楽教員	(114)
第2節	植民地朝鮮における中等教員養成	(123)
第3節	師範学校音楽教員による唱歌教科書および音楽理論書	(126)
1)	京城師範学校音楽教育研究会編『初等唱歌』	(127)
2)	五十嵐悌三郎・吉沢実・安藤芳亮共著『新制音楽要義』	(132)
小結		(134)

第6章 植民地朝鮮における日本人音楽家による音楽会の実態

第1節	朝鮮におけるクラシック音楽会の状況	(138)
-----	-------------------	-------

第2節	日本人音楽家の来朝音楽会	(143)
第3節	日本人音楽家による来朝音楽会の朝鮮人観客層	(150)
第4節	日本人音楽家の音楽会への朝鮮人の反響	(155)
小結		(161)

第7章 総力戦体制下の朝鮮と音楽の役割

—組織の一元化と在朝鮮日本人音楽家の活動—

第1節	朝鮮の総力戦体制運動の展開と音楽の役割	(165)
1)	総力戦体制運動の展開	(165)
2)	音楽の役割	(168)
第2節	総力戦体制期における音楽組織	(170)
1)	朝鮮音楽家協会	(170)
2)	朝鮮文芸会	(174)
3)	京城音楽協会	(177)
4)	朝鮮音楽協会	(181)
第3節	朝鮮音楽協会の事業活動と日本人音楽家の役割	(185)
1)	音楽の指導と統制	(186)
2)	朝鮮音楽協会の事業内容	(190)
①	各種音楽会	(190)
②	音楽競演大会	(192)
③	国民皆唱運動	(194)
④	音楽技芸資格認定試験	(197)
第4節	日本人音楽家の役割：大場勇之助と平間文寿の事例を中心に	(200)
1)	大場勇之助の事例	(200)
2)	平間文寿の事例	(205)
小結		(208)

終章

第1節	近代朝鮮が迎えた音楽界の構図の変化	(211)
1)	既存朝鮮楽と近代に向かう朝鮮楽の変化	(211)
2)	西洋音楽の受容	(212)
第2節	植民地朝鮮における日本人の音楽活動	(213)
1)	音楽教育活動	(214)
2)	クラシック音楽会活動	(218)

3) 音楽組織の一元化に向けた音楽団体での活動	(219)
第3節 日韓西洋音楽受容史における日本人の音楽活動の意義	(221)
小結 今後への展望	(223)

【参考文献】	(225)
--------	-------

【表】

<表1-1> 音楽用語	(23)
<表2-1> 『近代日本音楽年鑑』に掲載された日本人の朝鮮における活動	(27)
<表2-2> 『東京音楽学校一覧』に記載された卒業生の朝鮮における活動	(29)
<表2-3> 官立師範学校状況 (1922～1942)	(31)
<表2-4> 官立京城師範学校の教員数と学生数	(32)
<表2-5> 東京音楽学校予科 (1年) の学科課程及び毎週の教授時間数 (1889年)	(37)
<表2-6> 東京音楽学校本科師範部 (2年) の学科課程及び毎週の教授時間数 (1889年)	(37)
<表2-7> 東京音楽学校本科専修部 (3年) の学科課程及び毎週の教授時間数 (1889年)	(38)
<表2-8> 東京音楽学校本科の声楽部・器楽部・楽歌部 (3年) の学科課程及び毎週の教授時間数 (1900年)	(39)
<表2-9> 東京音楽学校 師範科の甲種 (3年) ・乙種 (1年) の学科課程及び毎週の教授時間数 (1900年)	(41)
<表2-10> 1885年～1912年 (明治期) の年度別東京音楽学校卒業生	(42)
<表2-11> 1885年～1912年 (明治期) の東京音楽学校の就職先別卒業生の数	(44)
<表2-12> 『東京音楽学校一覧』による卒業生の就職先事例	(45)
<表2-13> 本科における中等音楽教員無試験検定の取得条件履修科目の毎週時間数	(48)
<表2-14> 尋常師範学校の学科目と授業毎週時間数	(49)
<表2-15> 高等女学校の学科目と授業毎週時間数	(50)
<表3-1> 唱歌・音楽科目教授時間数の変遷	(60)
<表3-2> 1910年～1944年の初等教育機関で使われた唱歌集	(83)
<表3-3> 認可音楽教科用関連図書一覧 (1925年4月～1927年7月)	(89)
<表3-4> 認可音楽教科用関連図書一覧 (1931年10月～1932年9月)	(91)
<表3-5> 認可音楽教科用関連図書一覧 (1932年10月～1933年9月)	(91)
<表4-1> 『文教の朝鮮』と『朝鮮の教育研究』における執筆者と掲載された記事の数	(98)

＜表4－2＞唱歌・音楽関連記事の執筆者と『朝鮮総督府及所属官署職員録』による履歴	(99)
＜表5－1＞朝鮮人の初等教育における就学率	(114)
＜表5－2＞1912年～1930年までの官公立中等学校職員数	(123)
＜表6－1＞毎日申報にみえる日本人音楽家の演奏活動記事	(143)
＜表6－2＞1920年5月4日に行われた柳兼子の独唱会のプログラム	(158)
＜表7－1＞国民精神総動員朝鮮連盟・国民総力朝鮮連盟の事務局の機構変遷	(166)
＜表7－2＞朝鮮文芸会第1回新作歌謡発表会プログラム（1937年7月11日）	(175)
＜表7－3＞朝鮮文芸会愛国歌謡大会の発表会プログラム（1937年9月30日）	(176)
＜表7－4＞大場勇之助略歴	(200)
＜表7－5＞平間文寿略歴	(205)

【図】

＜図7－1＞朝鮮連盟事務局内宣伝・文化関連部署の変遷	(168)
----------------------------	-------

【楽譜】

＜楽譜4－1＞あゝ九勇士	(110)
＜楽譜7－1＞京城府歌	(203)

【スキャンした新聞記事及び新聞内の写真】

＜新聞7－1＞京城音楽協会第1回演奏会プログラム	(179)
＜新聞7－2＞京城音楽協会第2回演奏会プログラム	(180)

【資料】

- 【資料1－1】『韓国作曲家辞典』に基づく植民地時代に日本の音楽学校に留学した人物と活動
- 【資料1－2】『韓国音楽総覧』に基づく植民地時代に日本の音楽学校に留学した人物と活動
- 【資料4－1】『文教の朝鮮』と『朝鮮の教育研究』における唱歌・音楽教育関連記事
- 【資料4－2】朝鮮初等教育研究会規定
- 【資料4－3】京城師範学校内の研究部ニ関スル規定
- 【資料5－1】京城師範学校音楽教育研究会編『初等唱歌』分析

- 【資料7-1】『朝鮮文芸会設立趣意書』
- 【資料7-2】『朝鮮音楽協会会議案』
- 【資料7-3】国民皆唱歌曲集の曲目《大政翼賛会選定『国民皆唱歌曲集』》
- 【資料7-4】朝鮮総督府令第197号 朝鮮興行等取締規定
- 【資料7-5】京城府歌の曲譜：『毎日申報』1926年10月21日

【付録】

- 【付録2-1】『東京音楽学校一覧』による卒業生の就職先事例
- 【付録5-1】京城師範学校音楽教育研究会編『初等唱歌』の中、朝鮮の情緒をモチーフにした曲と、朝鮮人により作曲・作詞された曲のまとめ

【凡例】

1. 本論文では近現代の韓国史を大韓帝国期（1897年10月から1910年8月）、日本による植民地統治期（1910年8月から1945年8月）、大韓民国期（1948年8月から現在まで至る）の3期に時期区分する。大韓帝国期は「旧韓国」、日本による植民地統治期は「植民地朝鮮」、大韓民国の建国以降は「韓国」とそれぞれ表記した。時代を超えて総称として用いる場合は「韓国」と表記した。
2. 年号は、西暦で表記した。
3. 曲名は《 》で表記した。
4. 韓国人姓名や韓国の固有名詞などで漢字表記がわからないものは、韓国語の発音をカタカナで表記した。
5. 引用文中の旧漢字は常用漢字に改めた。しかし、漢文の原意をそこなわないため旧漢字のまま引用したところもある。
6. 引用文中で判読不能の文字や修正が入り判読できない文字などは■で表記した。

本 文

本文は、2021年7月に韓国で出版されたため、全文公開できない。

著者名：金志善

題名：식민지조선의 서양음악수용과 일본인의 음악활동
(植民地朝鮮の西洋音楽受容と日本人の音楽活動)

出版社：民俗苑

出版年度：2021年7月

ISBN：9788928516278

参考文献

<史料>

- 『官報』（旧韓国）
- 『官報』（日本）
- 『朝鮮総督府官報』
- 『朝鮮総督府及所属官署職員録』
- 『朝鮮総督府施政年報』
- 『朝鮮総督府統計年報』
- 『朝鮮音楽協会会議案』
- 『明治四十三年勅令第三百十九号第五項ノ職員ヲ任用スル場合ニ於ケル官等ニ関スル件』

<日本刊行新聞及び雑誌など>

- 『大阪毎日新聞朝鮮版』
- 『国民新聞』
- 『読売新聞』
- 『音楽年鑑』
- 『青弦会 CONCERT10 岩本政蔵音楽教育40周年記念公演』（パンフレット）

<朝鮮刊行新聞及び雑誌>

- 『京城日報』
- 『京郷新聞』
- 『読書新聞』
- 『東亜日報』
- 『毎日申（新）報』
- 『新韓日報』
- 『朝鮮日報』
- 『朝鮮中央日報』
- 『中央日報』
- 『中外日報』
- 『皇城新聞』
- 『開闢』

『国民教育』
『東光』
『文教の朝鮮』
『三千里』
『新家庭』
『新時代』
『時兆』
『女性』
『朝光』
『朝鮮の教育研究』
『朝鮮年鑑』
『朝鮮と建築』

<学校一覧>

『官立京城師範学校一覧』（1933年）
『京畿道公立師範学校一覧』（1924年）
『京城師範学校総覧』（1929年）
『京城帝国大学予科一覧』（1930）
『朝鮮正楽伝習所一覧』
『東京音楽学校一覧』（1889～1941）
『東京音楽学校第四臨時教員養成所一覧』（1926～1931）
『梨花女子専門梨花保育学校一覧』（1937）

The Korea Mission Field, Vol. X, No. 10. Oct., 1914.

Ewha College Catalogue. Seoul, Korea: Y.M.C.A. Press, April, 1930.

<唱歌集及び音楽教科書などの関連書>

安藤芳亮（1937）『唱歌基本練習読本』京城：釘本楽器店。
五十嵐悌三郎・吉沢実・安藤芳亮（1937）『新制音楽要義』京城：朝鮮地方行政学会。
楽書刊行協会（1913）『高等女学校楽典教科書』東京：高い楽器店。
小山作之助編（1903）『輪唱歌集』東京：共益商社楽器店蔵版。
小山作之助編（1904）『重音唱歌集 第1集』東京：共益商社楽器店蔵版。
田中正平・田村虎蔵（1902）『近世楽典教科書』東京・大阪：開成館。
永井幸次・田中銀之助（1911）『女子音楽教科書 教師用』大阪：開成館蔵版。
京城師範学校音楽教育研究会編（1935）『初等唱歌第一学年』大阪：日本唱歌出版社。

京城師範学校音楽教育研究会編（1935）『初等唱歌第二学年』大阪：日本唱歌出版社。
 京城師範学校音楽教育研究会編（1935）『初等唱歌第三学年』大阪：日本唱歌出版社。
 京城師範学校音楽教育研究会編（1935）『初等唱歌第四学年』大阪：日本唱歌出版社。
 京城師範学校音楽教育研究会編（1935）『初等唱歌第五学年』大阪：日本唱歌出版社。
 京城師範学校音楽教育研究会編（1935）『初等唱歌第六学年』大阪：日本唱歌出版社。
 京城師範学校音楽教育研究会編（1937）『初等唱歌解説書第一学年用』京城：株式会社朝鮮地方行政学会。
 京城師範学校音楽教育研究会編（1939）『初等唱歌解説書第三学年用』京城：朝鮮図書出版株式会社。
 京城師範学校音楽教育研究会編（1939）『初等唱歌解説書第四学年用』京城：朝鮮図書出版株式会社。
 京城師範学校音楽教育研究会編（1939）『初等唱歌解説書第五学年用』京城：朝鮮図書出版株式会社。
 京城師範学校音楽教育研究会編（1939）『初等唱歌解説書第六学年用』京城：朝鮮図書出版株式会社。
 西宮森太郎編（1943）『大政翼賛会選定 二部合唱による 国民皆唱歌曲集』東京：白眉出版社。

<日本語文献>

秋山邦晴（2003）『昭和の作曲家たち 太平洋戦争と音楽』東京：みすず書房。
 渡部学・阿部洋（1988）『日本植民地教育政策史料集成（朝鮮篇）』（全69巻）東京：龍溪書舎。
 有吉三七（1876）『朝鮮事情』東京：東洋社。
 有馬純吉（1931）『朝鮮紳士録』京城：朝鮮紳士録刊行会。
 石田一志（2005）『モダニズム変奏曲 東アジアの近現代音楽史』東京：朔北社。
 稲垣恭子（2007）『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化—』東京：中央公論新社。
 稲葉継雄（1999）『旧韓国教育と日本人教育』福岡：九州大学出版会。
 稲葉継雄（2001）『旧韓国～朝鮮の日本人教員』福岡：九州大学出版会。
 稲葉継雄（2005）『旧韓国～朝鮮の「内地人」教育』福岡：九州大学出版会。
 岡久雄（1940）『朝鮮教育行政』京城：帝国地方政学会朝鮮本部。
 岡部芳広（2007）『植民地台湾における公学校唱歌教育』東京：明石書店。
 奥中康人（2008）『国家と音楽 伊澤修二がめざした日本近代』東京：春秋社。
 加藤長江・白井嶺南・平戸大編（1922）『音楽年鑑』東京：竹中書店。
 金崎金平（1913）『新朝鮮及新満洲全』京城：朝鮮雑誌社。

- 兼常清佐（1913）『日本の音楽』東京：六合館。
- 上田誠二（2010）『音楽はいかに現代社会をデザインしたか 教育と音楽の大衆社会史』東京：新曜社。
- 蒲生美津子他（2007）『近代日本における音楽観—兼常清佐を中心に—』平成17～18年度科学学研究費補助金 基盤研究（C）研究成果報告書、沖縄：沖縄県立芸術大学音楽学部。
- 河口道郎（1996）『近代音楽教育論成立史研究』東京：音楽之友社。
- 北村久雄（1926）『音楽教育の新研究』東京：モナス。
- 北村久雄（1934）『正しい音楽生活の指導』東京：厚生閣書店。
- 木村健二（1989）『在朝日本人社会史』東京：未来事。
- 金泰勲（1996）『近代日韓教育関係史研究序説』東京：雄山閣。
- 久保田優子（2005）『植民地朝鮮の日本語教育』福岡：九州大学出版会。
- 倉田喜弘（2006）『日本レコード文化史』東京：岩波書店。
- 小池静子（2009）『柳宗悦を支えて 声楽と民芸の母・柳兼子の生涯』東京：現代書館。
- 高仁淑（2004）『近代朝鮮の唱歌教育』福岡：九州大学出版会。
- 国民学校制度研究会（1941）『小学校対比国民学校法規事項別解義』東京：文教書院。
- 国民総力朝鮮連盟（1943）『国民総力運動要覧』京城：国民総力朝鮮連盟。
- 京城帝国大学学生課編（1938）『京城帝国大学 学生生活調査報告』（朝鮮印刷株式会社印行）。
- 坂本麻実子（2006）『明治中等音楽教員の研究—『田舎教師』とその時代—』東京：風間書房。
- 佐藤由美（2000）『植民地教育政策の研究【朝鮮・一九〇五—一九一一】』東京：龍溪書舎。
- 佐野通夫（2006）『日本植民地教育の展開と朝鮮民衆の対応』東京：社会評論社。
- さねとう けいしゅう（1981）『中国留学生史談』東京：第一書房。
- 下中邦彦（1981）『音楽事典 第1巻』東京：平凡社。
- 職業指導研究会編（1935）『音楽家になるには』東京：良国民社。
- 新日本海新聞社鳥取県大百科事典編集委員会編（1984）『鳥取県大百科事典』鳥取：新日本海新聞社。
- 青洲公立高等普通学校（1937）『各科教授ノ方針並学習指導綱領』青洲：ハカマタ印刷所。
- 園部三郎・山住正己（1962）『日本の子どもの歌 歴史と展望』東京：岩波書店。
- 高崎宗司（1982）『朝鮮の土となった日本人 浅川巧の生涯』東京：草風館。
- 高崎宗司（2002）『植民地朝鮮の日本人』東京：岩波書店。
- 多胡吉郎（2008）『わたしの歌を、あなたに 柳兼子、絶唱の朝鮮』東京：河出書房新社。
- 遠山稲子編（1912）『歌ものがたり』東京：東京社。
- 千葉潤之介編（2002）『新編 春の海 宮城道雄随筆集』東京：岩波書店。

- 趙景達（2008）『植民地期朝鮮の知識人と民衆 植民地近代性論批判』東京：有志舎。
- 趙景達（2012）『近代朝鮮と日本』東京：岩波書店。
- 朝鮮史研究会編（2011）『朝鮮史研究入門』名古屋：名古屋大学出版会。
- 朝鮮人事興信録編集部（1935）『朝鮮人事興信録』京城：朝鮮新聞社。
- 朝鮮総督府（1912）『教科用図書一覧』（明治45年1月改訂第6版）。
- 朝鮮総督府（1915）『教科用図書一覧』（体制4年12月改訂第9版）。
- 朝鮮総督府（1922）『朝鮮事情』京城：朝鮮印刷株式会社。
- 朝鮮総督府（1924）『朝鮮の風習』京城：朝鮮印刷株式会社。
- 朝鮮総督府（1926）『朝鮮雑記』京城：朝鮮印刷株式会社。
- 朝鮮総督府『本府編纂教科用図書一覧』（1937年7月現在）。
- 朝鮮総督府『本府発行教科用図書一覧』（1939年5月現在）。
- 朝鮮総督府（1939）『教科書編輯彙報 第三輯』京城：朝鮮書籍印刷株式会社。
- 朝鮮総督府（1939）『教科書編輯彙報 第四輯』京城：朝鮮書籍印刷株式会社。
- 朝鮮総督府（1940）『情報宣伝』京城：株式会社大同出版社。
- 朝鮮総督府（1941）『国民学校特集 教科書編輯彙報 第八輯』京城：朝鮮書籍印刷株式会社。
- 朝鮮総督府（1941）『国民学校特集 第二 教科書編輯彙報 第九輯』京城：朝鮮書籍印刷株式会社。
- 朝鮮総督府（1942）『国民学校特集 第四 教科書編輯彙報 第十一輯』京城：朝鮮書籍印刷株式会社。
- 朝鮮総督府学務局（1927）『既認可教科書用図書一覧』（1925年4月～1927年7月）京城：大和商会印刷所。
- 朝鮮総督府学務局（1932）『認可教科用図書一覧』（1931年10月～1932年9月）京城：朝鮮印刷株式会社。
- 朝鮮総督府学務局（1933）『認可教科用図書一覧』（1932年10月～1933年9月）京城：行政学会印刷所。
- 朝鮮総督府学務局学務課（1938）『朝鮮における教育革新の全貌』京城：朝鮮印刷株式会社。
- 朝鮮総督府学務局学務課編（1938）『朝鮮学事例規』京城：朝鮮教育会。
- 朝鮮総督府学務局編（1943）『中学校教科教授及修練指導要目』京城：行政学会印刷所。
- 朝鮮総督府学務局編（1944）『師範学校教科教授及修練指導要目』京城：行政学会印刷所。
- 津上智実（2010）『神戸女学院創立135周年記念「100年前の卒業生」ピアニスト小倉末子の軌跡』展 図録』西宮市：神戸女学院「小倉末子展」実行委員会。
- 月脚達彦（2009）『朝鮮開化思想とナショナリズム 近代朝鮮の形成』東京：東京大学出版会。

- 塚原康子（1993）『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』東京：多賀出版株式会社。
- 塚原康子他（2001）『ブラスバンドの社会史』東京：青弓社ライブラリー。
- 塚原康子（2009）『明治国家と雅楽 伝統の近代化／国楽の創成』東京：有志舎。
- 筒井清忠（1995）『日本型「教養」の運命』東京：岩波書店。
- 寺崎昌男・「文検」研究会編（1997）『「文検」の研究 文部省教員検定試験と戦前教育学』東京：学文社。
- 東京音楽大学企画室（1987）『東京音楽大学80年史』東京：大日本印刷株式会社。
- 東京芸術大学音楽取調掛研究班（1976）『音楽教育成立への軌跡』東京：音楽之友社。
- 東京芸術大学百年史刊行委員会（1987）『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編 第一卷』東京：音楽之友社。
- 東京芸術大学百年史編集委員会（2003）『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編 第二卷』東京：音楽之友社。
- 東京芸術大学音楽部（2013）『同声会会員名簿』東京：広済堂。
- 戸ノ下達也（2008）『音楽を動員せよ』東京：青弓社。
- 戸ノ下達也・長木誠司（2008）『総力戦と音楽文化 音と声の戦争』東京：青弓社。
- 戸ノ下達也（2010）『「国歌」を唱和した時代 唱和の大衆歌謡』東京：吉川弘文館。
- 供田武嘉律（1996）『日本音楽教育史』東京：音楽之友社。
- 中村洪介（2003）『近代日本洋楽史序説』東京：東京書籍。
- 中村理平（1993）『洋楽導入者の軌跡 日本近代洋楽史序説』東京：刀水書房。
- 中村理平（1996）『キリスト教と日本の洋楽』東京：大空社。
- 永島広紀（2011）『戦時期朝鮮における「新体制」と京城帝国大学』東京：ゆまに書房。
- 西川末吉編（1935）『各科教育の動向』釜山：三重出版社。
- 西村真太郎（1923）『朝鮮の倂』京城：朝鮮警察協会。
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典 第二版 第十一巻』東京：小学館。
- 日本音楽教育学会編（1979）『音楽教育学の展望』東京：平凡社。
- 日外アソシエーツ編（2000a）『新訂増補人物レファレンス事典 明治・大正・昭和（戦前）編 あ〜し』東京：日外アソシエーツ株式会社。
- 日外アソシエーツ編（2000b）『新訂増補人物レファレンス事典 明治・大正・昭和（戦前）編 す〜わ』東京：日外アソシエーツ株式会社。
- 乗杉恂編（1999）『乗杉嘉壽遺文集』東京：蓬萊屋印刷所。
- 新村出編（1955）『広辞苑第5版』東京：岩波書店。
- 芳賀登他監（1993）『日本女性人名辞典』東京：日本図書センター。
- 秦郁彦編（2002）『日本近現代人物履歴事典』東京：東京大学出版会。
- 朴燦鎬（1987）『韓国歌謡史 1895-1945』東京：晶文社。
- 兵藤裕己（2000）『《声》の国民国家・日本』東京：日本放送出版協会。

- 平間文寿（1977）『歌の渚』東京：栄光出版社。
- 堀内久美雄編（1966a）『新訂標準音楽辞典アーテ第二版』東京：音楽之友社。
- 堀内久美雄編（1966b）『新訂標準音楽辞典トーワ第二版』東京：音楽之友社。
- 本多佐保美（2004）『音楽教育史研究における制度・教師・学習者の関係性の探究—国民学校時代の音楽教育体験者の聞き取り調査に基づいて—』（平成13年度～15年度科学研究費補助金研究成果報告書（基盤研究(B)(1)）、課題番号：13480054）千葉：正文社。
- 本多佐保美（2011）『昭和初期小学校音楽科教育の形成過程に関する研究』（平成20～22年度科学研究費補助金研究成果報告書（基盤研究(C)(2)）、課題番号：20530803）千葉：正文社。
- 増井敬二（2003）『日本オペラ史～1952』東京：水曜社。
- 松下鈞（1997）『近代日本音楽年鑑』（全19巻、復刻版）東京：大空社。
- 松橋圭子編（1987）『柳兼子音楽活動年譜』（『民芸』昭和59年10月号～61年8月号抜刷）日本民芸協会。
- 松村松盛（1925）『明け行く朝鮮』東京：帝国地方行政学会（京城：帝国地方行政学会朝鮮本部）。
- 松本武祝（1998）『植民地権力と朝鮮農民』東京：社会評論社。
- 三谷博編（2004）『東アジアの公論形成』東京：東京大学出版会。
- 宮嶋博史・李成市・尹海東・林志弦（2004）『植民地近代の視座 朝鮮と日本』東京：岩波書店
- 森下正夫（2003）『伊澤修二 その生涯と業績』東京：高遠町図書館。
- 森武一（1897）『朝鮮案内』東京：東京築地活版製造所。
- 森田芳夫（1945）『朝鮮に於ける国民総力運動史』京城：国民総力朝鮮連盟。
- 文部省内教育史編纂会（1938）『明治以降教育制度発達史』（第二巻）東京：教育資料調査会。
- 文部省内教育史編纂会（1938）『明治以降教育制度発達史』（第三巻）東京：教育資料調査会。
- 文部省内教育史編纂会（1938）『明治以降教育制度発達史』（第四巻）東京：教育資料調査会。
- 文部省内教育史編纂会（1938）『明治以降教育制度発達史』（第六巻）東京：教育資料調査会。
- 文部省内教育史編纂会（1939）『明治以降教育制度発達史』（第七巻）東京：教育資料調査会。
- 文部省内教育史編纂会（1939）『明治以降教育制度発達史』（第十巻）東京：教育資料調査会。
- 文部省普通学務局編（1941）『国民学校令及国民学校令施行規則』内閣印刷局。

- 文部省編（1987）『文部省例規類纂』（第三卷）東京：大空社。
- 安田寛（2000）『日韓唱歌の源流』東京：音楽之友社。
- 八束周吉（1941）『朝鮮国民学校教則の実践』大阪：日本出版社。
- 山口県教育会編（1982）『山口県百科事典』東京：大和書房。
- 山下達也（2011）『植民地朝鮮の学校教員 初等教員集団と植民地支配』福岡：九州大学出版会。
- 山住正己（1967）『唱歌教育成立過程の研究』東京：東京大学出版会。
- 山住正己（1987）『日本教育小史 近・現代』東京：岩波書店。
- 山住正己（1994）『子どもの歌を語る 唱歌と童謡』東京：岩波書店。
- 山住正己（1997）『戦争と教育 四つの戦後と三つの戦前』東京：岩波書店。
- 山田寛人（2004）『植民地朝鮮における朝鮮語奨励政策 朝鮮語を学んだ日本人』東京：不二出版。
- 吉田正男（1938）『皇国臣民教育の原理と実践』京城：朝鮮公民教育会。
- 劉麟玉（2005）『植民地下の台湾における学校唱歌教育の成立と展開』東京：雄山閣。
- 歴史学研究会編（2011）『「韓国併合」100年と日本の歴史学』東京：青木書店。
- 和歌山県師範学校附属国民学校編（1941）『国民学校教科経営実際問題の研究第十輯芸能科音楽の実践』和歌山：和歌山県教育会。
- 渡辺裕（1989）『聴衆の誕生』東京：春秋社。
- 渡辺裕・増田聡他（2005）『クラシック音楽の政治学』東京：青弓社。
- 渡辺裕（2007）『考える耳 記憶の場、評論の眼』東京：春秋社。
- 渡辺裕（2010a）『考える耳[再論] 音楽は社会を映す』東京：春秋社。
- 渡辺裕（2010b）『歌う国民』東京：中央公論新社。

<日本語論文>

- 阿部洋（1976）「解放前韓国における日本留学」『韓』第5巻、12号、東京：韓国研究院、5～73頁。
- 庵逄由香（1994）「朝鮮における戦争動員政策の展開—「国民運動」の組織化を中心に—」『国際関係学研究』第21集、東京：津田塾大学、1～19頁。
- 이즈카 에리토（2008）「明治末年の韓国における能楽公演：明治四三年「国謡」能楽公演を中心に」『한림일본학』第13号、춘천：한림대학교 일본학연구소、4～21頁。
- 板垣竜太（2011）「批判理論の陥穽—ある同時代史的省察—」『「韓国併合」100年と日本の歴史学 「植民地責任」論の視座から』東京：青木書店、231～261頁。
- 植村幸生（1993）「韓国近代音楽史への胎動—80年代後半の研究動向から—」『東洋音楽研究』第57号、東京：東洋音楽学会、89～98頁。
- 植村幸生（1997）「植民地期朝鮮における宮廷音楽の調査をめぐって—田邊尚雄「朝鮮雅

- 楽調査の政治的文脈」一』『朝鮮史研究会論文集』第35集、東京：朝鮮史研究会、117～144頁。
- 加藤善子（2005）「クラシック音楽愛好家とは誰か」『クラシック音楽の政治学』東京：青弓社、144～174頁。
- 金志善（2008）「近代朝鮮における西洋音楽専門機関—梨花女子専門学校音楽科を中心に—」『東洋音楽研究』第74号、東京：東洋音楽学会、47～61頁。
- 金志善（2011）「植民地朝鮮における中等音楽教育と教員の実態—『日本近代音楽年鑑』と『東京音楽学校一覧』をめぐって—」『こども教育宝仙大学紀要』第2号、東京：こども教育宝仙大学、27～44頁。
- 金志善（2013）「植民地朝鮮における唱歌・音楽教育政策とその実態」『富士ゼロックス小林節太郎記念基金2010年度研究助成論文』東京：富士ゼロックス小林節太郎記念基金、1～35頁。
- 金志善（2013）「植民地朝鮮と日本の中等音楽教員をめぐる東京音楽学校卒業生の機能と役割—京城師範学校教諭の吉沢実の活動事例を中心に—」『植民地教育史研究年報』第15号、東京：日本植民地教育史研究会、102～127頁。
- 君島和彦（1977）「朝鮮における戦争動員体制の展開過程」『日本ファシズムと東アジア現代史シンポジウム』東京：青木書店、70～105頁。
- 久保田公平（1943）「国民皆唱運動に関して」『音楽公論』第3巻、第3号、東京：音楽評論社、18～23頁。
- 呉鉉烈（1999）「韓国當地能楽享受の諸相、稿—在韓国謡曲家名鑑—」『大学院紀要』第43号、東京：法政大学、283～304頁。
- 坂本麻実子（2008）「東京音楽学校における唱歌教員養成の終焉」『富山大学人間発達科学部紀要』第2巻、第2号、富山：富山大学、13～18頁。
- 渋川久子（1987）「東京高等音楽学院史の研究（1）」『研究紀要』第22集、東京：国立音楽大学、233～262頁。
- 徐在壽（1935）「唱歌科」『各科教育の動向』釜山：三重出版社、124～135頁。
- 徐禎完（2010）「植民地朝鮮における能—京釜鉄道開通式典における「国家芸能」能—」『アジア遊学138 植民地朝鮮と帝国日本 民族・都市・文化』東京：勉誠出版、134～153頁。
- 高岡裕之（2008）「十五年戦争期の「国民音楽」」『総力戦と音楽文化 音と声の戦争』東京：青弓社、34～54頁。
- 趙景達（2011）「戦後日本の朝鮮史研究—近代史研究を中心に—」『「韓国併合」100年と日本の歴史学 「植民地責任」論の視座から』東京：青木書店、165～198頁。
- 朝鮮文芸会（1937）「朝鮮文芸会設立趣意書」『歌曲集』京城：朝鮮文芸会、2～3頁。
- 戸ノ下達也（2001）「電波に乗った歌声」『年報・日本現代史』第7号、東京：現代史料出版、115～145頁。
- 並木真人（2004）「植民地朝鮮における「公共性」の検討」『東アジアの公論形成』東

- 京：東京大学出版会、197～222頁。
- 藤井浩基（2004）「朝鮮における石川義一の音楽活動：1920年代後半を中心に」『北東アジア文化研究』第19号、鳥取：鳥取短期大学北東アジア文化総合研究所、73～90頁。
- 藤井浩基（2008）「音楽にみる植民地期朝鮮と日本の関係史—1920～30年代の日本人による活動を中心に—」大阪：大阪芸術大学大学院博士論文。
- 朴宣美（2004）「植民地時期における朝鮮人女子日本留学生の研究」京都：京都大学大学院博士論文。
- 朴成泰（1999）「大韓帝国における愛国唱歌教育運動と学部植民地音楽教育政策—小出雷吉による『普通教育唱歌集』の編纂をめぐって—」『音楽教育学』第29巻第2号、東京：日本音楽教育学会、13～28頁。
- 朴永奎（2003）「植民地朝鮮における教員養成—師範学校生徒の出自と招聘教員を中心に—」『アジア教育史研究』第12号、東京：アジア教育史学会、38～55頁。
- 朴永奎（2005）「植民地朝鮮における教育養成に関する研究」福岡：九州大学大学院博士論文。
- 本間千景（2005）「『保護国』期韓国の教員需要と供給」『人文学報』第92巻、京都：京都大学人文科学研究所、145～176頁。
- 関庚燦（1995）「韓国における西洋音楽の受容—朝鮮総督府の音楽教育政策と日本洋楽の影響を中心に—」東京：東京芸術大学修士論文。
- 山田浩之（1992）「戦前における中等教員社会の階層性—学歴による給与の格差を中心として—」『教育社会学研究』第50集、東京：日本教育社会学会、308～324頁。
- 山本華子（1994）「朝鮮植民地時代における学校唱歌教育—初等教育用唱歌集およびその所収唱歌の分析を中心に—」東京：東京芸術大学修士論文。
- 山本華子・李知宣（2013）「1910年代の朝鮮における日本の伝統音楽調査①—『京城日報』の記事を参照して—」『洗足論業』第41号、東京：洗足学園音楽大学、61～69頁。
- 山本華子・李知宣（2014）「1910年代の朝鮮における日本の伝統音楽調査②—『京城日報』の記事を参照して—」『洗足論業』第42号、東京：洗足学園音楽大学、129～139頁。

<韓国語文献>

- 공제욱・정근식편（2006）『식민지의 일상 지배와 균열』서울：문화과학사。
- 具斗会（1983）『和声学研究』서울：世光出版社。
- 金聖泰（1966）「洋楽七十年史」『音楽年鑑』서울：世光出版社。
- 金聖泰（1971）『和声法』서울：音楽芸術社。
- 김수현・이수정（2008）『한국근대음악기사자료집』（全10巻）서울：민속원。

- 김영희A (2003) 『일제시대 농촌통제정책 연구』 서울 : 경인문화사.
- 김창욱 (2010) 『洪蘭坡音樂研究』 서울 : 민속원.
- 權度希 (2004) 『한국 근대음악 사회사』 서울 : 민속원.
- 羅運榮 (1956) 『和聲樂』 서울 : 民衆書館.
- 羅運榮 (1978) 『樂式論』 서울 : 世光出版社.
- 羅運榮博士回甲記念韓國音樂論業編輯委員會 (1982) 『羅運榮博士回甲記念 韓國音樂論業』 서울 : 世光出版社.
- 羅運榮 (1983) 『和聲學研究』 서울 : 世光出版社.
- 南宮堯悅 (1987) 『開化期の 韓國音樂』 서울 : 世光出版社.
- 노동은 (1995) 『한국근대음악사1』 서울 : 한길사.
- 노동은·이건용 (1991) 『民族音樂論』 서울 : 한길사.
- 문옥배 (2001) 『한국교회음악수용사』 서울 : 예술.
- 閔庚燦 (1997) 『韓國唱歌의 索引과 解題』 서울 : 한국예술종합학교한국예술연구소.
- 閔淑鉉、朴海環 (1981) 『한가람 봄바람에 梨花100年野史』 서울 : 知人社.
- 박찬호 (2009) 『한국가요사1』 서울 : 미지북스.
- 박찬호 (2009) 『한국가요사2』 서울 : 미지북스.
- 방기중편 (2004) 『일제 파시즘 지배정책과 민중생활』 서울 : 혜안.
- 徐友錫 (1985) 『전통문화와 서양문화 : 그 충격과 수용의 측면에서』 서울 : 성균관대학
- 서우석 (1988) 『西洋音樂의 受容과 發展』 서울 : 나남.
- 孫泰龍編 (2001) 『每日申報音樂記事總索引』 서울 : 민속원.
- 孫禎睦 (1996) 『日帝強占期都市社會相研究』 서울 : 一志社.
- 宋芳松 (1984) 『韓國音樂通史』 서울 : 일조각.
- 송방송 (2001) 『한국음악학서설』 서울 : 민속원.
- 宋芳松·宋相赫外 (2002) 『경성방송국악방송곡목록색인』 서울 : 민속원.
- 宋芳松 (2003) 『韓國近代音樂史研究』 서울 : 민속원.
- 宋芳松 (2009) 『한국근대음악인사전』 서울 : 보고사.
- 慎鏞廈 (1994) 『韓國 近代社會의 構造와 變動』 서울 : 一志社.
- 呂博東 (2002) 『일제의 조선어업지배와 이주어촌 형성』 서울 : 보고사.
- 연세대학교 국학연구원편 (2004) 『일제의 식민지배와 일상생활』 서울 : 혜안.
- 오성철 (2000) 『식민지초등교육의 형성』 서울 : 교육과학사.
- 이강숙他 (2001) 『우리양악100년』 서울 : 현암사.
- 이영미 (2006) 『한국대중가요사』 서울 : 민속원.
- 李宥善 (1968) 『韓國洋樂八十年史』 서울 : 中央大學校出版局.
- 李宥善 (1976) 『韓國洋樂百年史』 서울 : 中央大學校出版局.
- 李宥善 (1985) 『增補版 韓國洋樂百年史』 서울 : 音樂春秋社.
- 이화여자대학교음악대학 (1986) 『이화음악』 제10호, 서울 : 이화여자대학교음악대학.

- 이화여자대학교음악연구소 (2003) 『이화여자대학교음악대학의역사1886~2002』 서울 : 나남출판.
- 張師勛 (1974) 『黎明의 東西音樂』 서울 : 宝晋齋.
- 장유정 (2006) 『오빠는 풍각쟁이야』 서울 : 민음in.
- 전지영 (2005) 『근대성의 침략과 20세기 한국의 음악』 서울 : 북코리아.
- 정선이 (2002) 『경성제국대학연구』 서울 : 문음사.
- 鄭忠良 (1967) 『梨花八十年史』 서울 : 梨大出版部.
- 鄭回甲他 (1994) 『韓國音樂總覽』 (下卷) 서울 : 韓國音樂協會.
- 朝鮮總督府 (1912) 『教育学 教科書』 朝鮮總督官房總務局印刷所印刷.
- 崔由利 (1997) 『日帝 末期 植民地 支配政策研究』 서울 : 国学資料院.
- 崔惠珠編 (2011) 『文教の朝鮮 総目次・人名索引』 서울 : 어문학사.
- 친일인명사전편찬위원회편 (2004) 『일제협력단체사전-국내중앙편-』 서울 : 민족문제연구소.
- 한국기독교역사연구소 (1990) 『한국기독교의 역사Ⅱ』 서울 : 기독교문사.
- 한국사연구회편 (2008a) 『새로운 한국사 길잡이상』 서울 : 지식산업사.
- 한국사연구회편 (2008b) 『새로운 한국사 길잡이하』 서울 : 지식산업사.
- 한국예술종합학교 한국예술연구소편 (1999) 『한국 작곡가 사전』 서울 : 시공사.
- 趙善宇編 (1999) 『音・樂・學・6 『매일신보』 음악기사 : 1930~1940』 부산 : 한국음악학학회.
- 한국정신문화연구원 (1991) 『韓國民族文化大百科事典』 서울 : 웅진출판주식회사.
- 한국정신문화연구원편 (1998) 『한국유성기음반총목록』 서울 : 민속원.
- 韓相宇 (2003) 『한국양악인물사1 기억하고 싶은 선구자들』 서울 : 지식산업사.

<韓國語論文>

- 강인철 (1992) 「월남 개신교・천주교의 뿌리」 『역사비평』 第19号、서울 : 역사문제연구소、91~141頁。
- 강명숙 (2007) 「일제시대 제1차 조선교육령 제정 과정 연구」 『한국교육사학』 第29卷 第1号、서울 : 한국교육사학회、1~24頁。
- 강명숙 (2008) 「조선교육회 기관지 『문교의 조선(文教の朝鮮)』에 나타난 조선인의 활동- 제2차 조선교육령기를 중심으로」 『한국교육사학』 第30卷第1号、서울 : 한국교육사학회、1~27頁。
- 강태구 (2012) 「경성후생실내악단에 관한 연구」 『韓國音樂史學報』 第48集、서울 : 韓國音樂史學會、5~44頁。
- 권숙인 (2006) 「도한(渡韓)의 권유—1900년대 초두 한국이민론 속의 한국과 일본—」 『사회와 역사』 第69集、서울 : 한국사회사학회、185~214頁。

- 권숙인 (2008) 「식민지 조선의 일본인—피식민 조선인과의 만남과 식민지식의 형성—」 『사회와 역사』 第80集、서울 : 한국사회사학회、109~139頁。
- 權惠根 (2009) 「韓國 近・現代의 音樂教育研究-韓・日音樂教育課程의 比較-」 서울 : 成均館大學校大學院 (博士學位論文)。
- 김경미 (2004) 「일제하 사립중등학교의 위계적 배치」 『한국교육사학』 第6卷 第2号
서울 : 한국교육사학회、31~48頁。
- 김난주 (2014a) 「1905년 노가쿠 조선 공연기 —시게야마 추자부로 요시토요의 기록을 중심으로—」 『人文研究』 第70号、경산 : 영남대학교 인문과학연구소、395~428頁。
- 김난주 (2014b) 「교젠(狂言) 조선(朝鮮) 공연기(公演記)—식민지 조선과 일본전통예능의 조우—」 『동아시아 문화연구』、第57号、서울 : 한양대학교 동아시아문화연구소、251~275頁。
- 김동노 (2004) 「식민지기 일상생활의 근대성과 식민지성」 『일제의 식민지배와 일상생활』 서울 : 연세대학교 국학연구원편、13~36頁。
- 김봉석 (2012) 「『朝鮮の教育研究』를 통해 본 일제시대 초등 역사수업의 실제양상」 『사회과교육연구』 第19卷第2号、청원 : 한국사회교과교육학회、1~18頁。
- 김백영 (2005) 「식민지 도시계획을 둘러싼 식민 권력의 균열과 갈등 : 1920년대“대경성(大京城) 계획”을 중심으로」 『사회와 역사』 第67号、서울 : 한국사회사학회、84~128頁。
- 김성학 (2003) 「일제시기 관변 교원단체의 형성과정과 그 사회적 기능」 『教育學研究』 第41卷第2号、서울 : 한국교육학회、277~306頁。
- 김성학 (2004) 「해방직후 교원단체의 등장과정과 활동을 통해 본 식민지 교육경험의 지속과 변동」 『교육사회학연구』 第14卷第2号、서울 : 한국교육사회학회、23~52頁。
- 김수현 (1998) 「다나베 히사오의 조선음악조사에 대한 비판적 고찰」 『韓國音樂史學報』 第22集、서울 : 韓國音樂史學會、115~145頁。
- 김수현 (2008) 「石川義一」 石川義一の 1920년대 조선에서의 활동에 대한 연구-궁중음악 채보와 민요조사를 중심으로-」 『2007문화관광부선정 전통예술우수논문집』、서울 : 문화관광부·한국국악학회、87~121頁。
- 金英宇 (1967) 「初等敎員養成 制度的變遷에 關한 歷史的研究」 『春川教育大學校論文集』 第4集、春川 : 春川教育大學校、67~88頁。
- 김영희A (2000) 「일제말기 國民總力運動의 전개와 農村統制政策」 『한국독립운동사연구』 제14집、천안 : 한국독립운동연구소、223~307頁。
- 김영희A (2002a) 「국민정신충동원운동의 실시와 조직」 『한국독립운동사연구』 제18집、천안 : 한국독립운동연구소、217~265頁。
- 金英喜A (2002b) 「국민정신충동원운동의 전개 형태와 그 침투」 『한국근현대사연구』

- 제22집, 서울 : 한국근현대사학회, 221~266頁。
- 金英喜A (2006) 「国民総力朝鮮連盟의 사무국 개편과 官辺団体에 대한 통제 (1940. 10 ~1945. 8)」 『한국근현대사연구』 제37집, 서울 : 한국근현대사학회, 233~317頁。
- 김영희B (2002) 「일제시기 라디오의 출현과 청취자」 『韓國言論學報』 제46-2호, 서울 : 韓國言論學會, 150~183頁。
- 김주영 (2002) 「在朝鮮 일본인 화가와 식민지 화단의 관계 고찰」 『美術史學研究』 第233・234号, 서울 : 韓國美術史學會, 301~327頁。
- 김지선 (2008) 「근대시기 일본의 음악학교에 유학한 조선인-도쿄음악학교의 사례를 중심으로-」 『韓國音樂史學報』 第41集, 서울 : 韓國音樂史學會, 149~186頁。
- 김지선 (2010) 「일제강점기 국내의 일본인 음악가들과 그 활동」 『韓國音樂史學報』 第45集, 서울 : 韓國音樂史學會, 261~291頁。
- 김지선 (2011) 「잡지기사에 나타난 식민지 조선의 창가・음악교육의 실태-『문교의 조선』과 『조선의 교육연구』의 교원에 의한 기사를 중심으로」 『韓國音樂史學報』 第46集, 서울 : 韓國音樂史學會, 97~130頁。
- 김지선 (2013) 「일본인 중등음악교원의 활동으로 본 근대조선의 서양음악 수용」 『동양음악』 第35集, 서울 : 서울대학교음악대학동양음악연구소, 109~130頁。
- 김지선・후쿠다 치에 (2016) 「1920년대 조선에서의 신일본음악 (新日本音樂) 의 전개 — 도산류 (都山流) 샤쿠하치 (尺八) 사토 레이잔 (佐藤令山) 의 활동을 중심으로 —」 『韓國音樂史學報』 第56集, 서울 : 韓國音樂史學會, 113~144頁。
- 金昌旭 (2004) 「洪蘭坡 音樂研究」 釜山 : 東亞大學校大學院 (博士學位論文) 。
- 金珞然 (2000) 「1930년대 서울 주민의 문화수용에 관한 연구-‘府民館’을 중심으로」 『서울학연구』 第15集, 서울 : 서울시립대학교서울학연구소, 199~236頁。
- 魯棟銀 (1993) 「한국양악사, 100년사인가? 360년사인가?」 『音樂과 民族』 第5号, 釜山 : 民族音樂硏究會, 57~61頁。
- 魯棟銀 (1997) 「노동은의 ‘알고싶다’10-조선음악협회는 어떤 친일단체이었는가? I -」 『音樂과 民族』 第14号, 釜山 : 民族音樂學會, 48~57頁。
- 魯棟銀 (2001) 「한국 관악의 역사」 『藝術文化』 第4号, 全州 : 全州大學校藝術文化硏究所, 27~98頁。
- 魯棟銀 (2003) 「일제하 음악인들의 친일논리와 단체」 『音樂과 民族』 第25号, 釜山 : 民族音樂學會, 51~131頁。
- 리철우 (2009) 「일본 제일의 미성(美聲)에서 ‘동양의 카루소’로 일세를 풍미」 『민족21』 第105集, 서울 : (주)민족21, 110~115頁。
- 민경찬 (1999) 「資料 京城師範學校教育硏究會『初等唱歌 第三學年用』東京大阪 : 日本唱歌出版社1932.」 『낭만음악』 第12卷第1号 (通卷45号), 서울 : 낭만음악사, 219~220頁。

- 박은경 (2001a) 「学部編纂『普通教育唱歌集』연구」 『천안외국어대학 논문집』 창간호
、천안 : 천안외국어대학、499~519頁。
- 박은경 (2001b) 「한국최초의 민간음악교육기관 조선정악전습소 연구」 『音樂과 民
族』 第21号、釜山 : 民族音樂学会、161~181頁。
- 朴枝香 (1988) 「일제하 여성고등교육의 사회적 성격」 『사회비평』 창간호、서울 : 나
남、254~288頁。
- 朴贊勝 (2002) 「서울의 일본인 거류지 형성과정 : 1880년대-1903을 중심으로」 『사회
와 역사』 第62号、서울 : 한국사회사학회、64~100頁。
- 변은진 (1998) 「日帝 戰時 과시증期 (1937-45) 朝鮮民衆의 現實認識과 抵抗」 서울 :
고려대학교대학원 (博士學位論文)。
- 문옥배 (2000) 「한국근대 교회음악 수용사 연구」 서울 : 한국예술종합학교음악원 (芸
術專門士學位論文)。
- 서정익 (2003) 「전시 일본의 총력전체제와 경제총동원」 『社会科学研究』 第22集、天
安 : 호서대학교사회과학연구소、247~284頁。
- 서정완 (2014) 「제국일본의 문화권력 연구」 『日本學報』 第100号、서울 : 한국일본학
회、115~133頁。
- 宋芳松 (2005) 「대한제국시절 군악대의 공연양상-최초 양악대의 공연종목을 중심으로
-」 『韓國音樂史學報』 第35集、서울 : 韓國音樂史学会、99~115頁。
- 송지원 (1993) 「조선후기 중인층 음악의 사회사적 연구」 『민족음악의 이해』 서울 :
민족음악연구회、153~217頁。
- 신계휴 (2002) 「朝鮮總督府 編纂 初等音樂教科書分析 研究」 『교육논총』 19集、인
천 : 인천교육대학교、43~69頁。
- 신설령 (2004) 「김관의 음악평론과 식민지근대」 釜山 : 東亜大学校大学院 (博士學位論
文)。
- 신승모 (2010) 「식민지시기 경성에서의 ‘취미’—재경성 (在京城) 일본인의 이념화변용
과정을 중심으로—」 『日本言語文化』 第38集、서울 : 韓國日本文化学会、585~
605頁。
- 신승모·오태영 (2010) 「식민지시기 ‘경성 (京城)’의 문화지정학적 위상에 관한 연
구」 『서울학연구』 第38集、서울 : 서울시립대학교 부설 서울학연구소、105~149
頁。
- 안홍선 (2004) 「경성사범학교의 교원양성교육 연구」 서울 : 서울대학교대학원 (碩士學
位論文)。
- 야마우치 후미타카 (山内文登、2000) 「일본대중문화 수용의 사회사 : 일제강점기 창가
와 유행가를 중심으로」 『낭만음악』 通卷49号、서울 : 낭만음악사、29~143頁。
- 야마우치 후미타카 (山内文登、2003) 「일제시대 음반제작에 참여한 일본인에 관한
시론」 『韓國音樂史學報』 第30集、서울 : 韓國音樂史学会、771~811頁。

- 야마우치 후미타카 (山内文登, 2009) 「일제시기 한국 녹음문화의 역사 민족지—제국 질서와 미시정치—」 성남 : 한국학중앙연구원 (博士学位論文)。
- 오미일 (2011) 「총동원체제하 생활개선캠페인과 조선인의 일상 식민도시 인천의 사회적 공간성과 관련하여」 『한국독립운동사연구』 제39집, 천안 : 한국독립운동연구소, 235~277頁。
- 오지선 (2002) 「조선총독부의 음악교육정책에 관한 연구」 서울 : 서울대학교大学院 (碩士學位論文)。
- 陸順鎮 (1993) 「開花期以後 韓國教育課程의 變遷에 관한 研究」 釜山 : 東亜大学校大学院 (博士学位論文)。
- 尹大石 (2007) 「경성제대의 교양주의와 일본어」 『大東文化研究』 第59集, 서울 : 成均館大学校大東文化研究院, 111~134頁。
- 윤대석 (2008) 「제의와 테크놀로지로서의 서양근대음악-일제말기의 양악-」 『상허학보』 第23集, 서울 : 상허학회, 115~136頁。
- 윤대석 (2010) 「경성 제국대학의 식민주의와 조선인 작가- ‘갈벽’의 심성과 문학-」 『우리말 글』 第49集, 大邱 : 우리말 글학회, 275~292頁。
- 尹八重 (1973) 「近代韓國教育의 内容—韓國教育課程發達史 (Ⅱ) —」 『서울教育大学校論文集』 第6集, 서울 : 서울教育大学校, 231~274頁。
- 이경분 (2010) 「일본 식민지 시기 서양음악의 수용과 그 정치적 의미」 『음악학』 第18集, 서울 : 한국음악학학회, 155~185頁。
- 이경분 (2011) 「일제시기 서양음악문화와 일본인의 영향」 『音樂論壇』 第25集, 서울 : 漢陽大学校音樂研究所, 159~186頁。
- 이병담 · 김혜정 (2007) 「조선총독부 초등학교 음악교육의 일탈과 실상 -일반창가의 체계와 내용을 중심으로-」 『日語日文学』 第34集, 釜山 : 大韓日語日文学会, 231~251頁。
- 이숙희 (2009) 「대한제국 악제의 성립 배경과 성격」 『서울학연구』 제35집, 서울 : 서울시립대학교서울학연구소, 59~110頁。
- 이승연 (2000) 「일제시대 대중음악과 한국인의 생활문화-1926년에서 1945년까지의 인기곡을 중심으로-」 서울 : 연세대학교대학원 (碩士學位論文)。
- 李元必 (1988) 「日帝統治期の 教員養成에 관한 研究」 『釜山教育大学論文集』 第24集, 釜山 : 釜山教育大学校, 17~69頁。
- 李元必 (1992) 「日帝強占期の 中等教員養成法制에 관한 研究」 『釜山教育大学論文集』 第28集, 釜山 : 釜山教育大学校, 248~267頁。
- 이정희 (2008) 「대한제국기 군악대 고찰」 『한국음악연구』 第44集, 서울 : 한국국악학회, 165~194頁。
- 이준희 (2009) 「일제시대 군국가요 (軍国歌謠) 연구」 『한국문화』 第46集, 서울 : 서울대학교규장각한국학연구원 (한국문화), 139~161頁。

- 李知宣・山本華子 (2013a) 「1910년대 조선에서의 일본 전통음악 사정 1—1915년-1917년 전반기의 『경성일보』 기사를 중심으로—」 『日本研究』 第32集、서울：中央大学校日本研究所、573～595頁。
- 李知宣・山本華子 (2013b) 「1910년대 조선에서의 일본 전통음악 사정 2—1917년후반기-1919년 『경성일보』 기사를 중심으로—」 『国樂教育』 第36集、서울：韓國国樂教育学会、105～127頁。
- 이지선 (2015a) 「『경성신보』의 조선 및 일본 전통공연예술 관련 기사 목록—1907년부터 1912년까지—」 『国樂院論文集』 第31集、서울：国立国樂院、199～248頁。
- 이지선 (2015b) 「『경성일보』의 조선 및 일본 전통공연예술 관련 기사 목록—1909년부터 1915년까지—」 『国樂院論文集』 第31集、서울：国立国樂院、249～268頁。
- 이지선 (2015c) 「1900년대～1910년대 경성 소재 일본인 극장의 일본 전통예술 공연 양상」 『国樂院論文集』 第31集、서울：国立国樂院、145～190頁。
- 李香哲 (2001) 「근대일본에 있어서의 『교양』의 존재형태에 관한 고찰-교양주의의 성립・ 전개・ 해체를 중심으로-」 『日本歴史研究』 第13集、：日本史学会、79～110頁。
- 임후남 (2002) 「대한제국기 초등교원의 양성」 서울：서울대학교대학원 (博士学位論文)。
- 林後男 (2003) 「개명관료 (開明官僚)로서의 근대교원」 『아시아교육연구』 第4卷第1号、서울：아시아교육연구소、105～132。
- 정규영 (2002) 「전시동원체제와 식민지 교육의 변용：일본식민지 지배하의 한국교육, 1937～1945」 『教育学研究』 第40集 第2号、益山：円光大学校教育問題研究所、35～64頁。
- 鄭在哲 (1984) 「日帝의 学部参与関官 및 統監府의 對韓國植民地主義 教育扶植政策」 『韓國教育問題研究所論文集』 第1集、서울：中央大学校韓國教育問題研究所、1～57頁。
- 鄭在哲 (1985) 「第3次朝鮮教育令施行期の 日帝植民地主義教育政策—1938～1943—」 『韓國教育問題研究所論文集』 第2集、서울：中央大学校韓國教育問題研究所、1～43頁。
- 鄭在哲 (1989) 「日帝下の 高等教育」 『韓國教育問題研究所論文集』 第5集、서울：中央大学校韓國教育問題研究所、37～109頁。
- 정진섭 (2003) 「Franz Eckert가 한국군악대 형성에 미친 영향과 발전방안에 대한 연구」 서울：중앙대학교대학원 (碩士學位論文)。
- 趙美恩 (2010) 「일제강점기 재조선 일본인 학교와 학교조합연구」 서울：성균관대학교대학원 (博士学位論文)。
- 천영주 (1997) 「일제강점기의 음악교과서 연구-1931-1945년 관공립학교를 중심으로-」 『음악과민족』 제13호、부산：민족음악학회、1～18頁。

- 崔勝賢 (1997) 「梨花音樂1920년대~1930년대의音樂教育」、『音樂研究』제15집、서울 : 한국음악학회、211~246頁。
- 崔勝賢 (2004) 「1930년 이화음악과의 『피아노旋律法』 출간과 선진 20세기 피아노교수법의 도입」 『이화음악논집발간10주년 기념 특별 기고문』 1~31頁。
- 최혜주 (2010) 「일본 東京地学協會의 조사활동과 조선인식」 『한국사연구』 제51집、서울 : 한국사연구회、231~269頁。
- 홍순권 (2004) 「일제시기 부산지역 일본인사회의 인구와 사회계층구조」 『역사와 경제』 제51집、부산 : 부산경남사학회、43~73頁。
- 홍정수 (1999) 「羅運榮音樂資料 (1) : 양악150년사메모」 『音樂과 民族』 第17号、釜山 : 民族音樂硏究會、196~220頁。

<その他>

Tai-whan Kwon et al., The Population of Korea,(Seoul,1975)

CD『浅草オペラ 華ひらく大正浪漫』（山野楽器、1998）の『ライナーノート』

要 旨

本論文は、日本による植民地支配下にあった朝鮮において在朝鮮日本人中等音楽教員・音楽家がどのような活動を行っていたのかを明らかにし、それが韓国西洋音楽受容史においてどのような意義を持っていたのかについて総合的に考察したものである。

日本と韓国の西洋音楽受容史研究は、これまで相互に関係をもたない歴史として記述されてきた。すなわち、日本における西洋音楽受容史研究は、明治時代（1868～1912）に日本が近代国家を形成していく過程において受容された西洋音楽とそれへの日本音楽の対応という枠組みで、一方、韓国における西洋音楽受容史研究は、西洋音楽の自主的受容をめぐる議論とともに、植民地宗主国である日本の音楽政策とそれに対する朝鮮の音楽面での従属という枠組みで行われてきた。

しかし、日韓両国における西洋音楽の受容は、近代という同時代性をもつ支配国対被支配国という激動の歴史の中で行われてきたため、それを別々に論じるのではなく、一つの流れとして捉えなければならない部分が数多くある。特に、韓国は日本による植民地支配を経験したため、音楽政策、音楽教育、音楽産業などの面で日本の影響を強く受けてきた。そこで注目されるのが、在朝鮮日本人の音楽活動である。彼らは日韓の近代音楽史を相互に結びつける役割を果たしたと考えられる。したがって彼らの活動の動向を明らかにすることで、これまでほとんど等閑視されてきた韓国における西洋音楽受容史の新たな側面を照射することができる。

そこで、本論文では7章にわたり植民地朝鮮における在朝鮮日本人音楽教員・音楽家の音楽活動について明らかにした。第1章では、現在まで行われてきた韓国における西洋音楽受容に関する先行研究の成果を概観することで、植民地朝鮮における西洋音楽受容の全般的な状況を把握した。先行研究では、宣教師により持ち込まれた教会音楽としての讃美歌、旧韓国政府により新設された軍楽隊、朝鮮最初の民間音楽教育機関であった朝鮮正楽伝習所、朝鮮最初の専門教育機関であった梨花女子専門学校音楽科、日本の音楽学校に留学した朝鮮人音楽家などに注目して韓国の西洋音楽受容を論じてきた。そこでそれらの概要を整理するとともに、韓国の西洋音楽受容の問題を考えるうえで、植民地期における在朝鮮日本人音楽家の活動も重要な要素であることを指摘した。

第2章では、植民地朝鮮に移住して音楽活動を行った日本人音楽家について、まず、『近代日本音楽年鑑』（復刻版）と『東京音楽学校一覧』の分析を通じて、どのような日本人音楽家が、どのような音楽活動を行ったのかを検討した。その結果、植民地朝鮮に渡った多くの日本人は、第四臨時教員養成所を含む東京音楽学校出身者が多く、師範学校や高等女学校などの中等教育機関で教鞭を執っていたことを明らかにした。

第3章では、第2章で得た、植民地朝鮮で音楽活動を行った日本人音楽家の多くが音楽教育活動を行っていたという事実を踏まえ、朝鮮における音楽教育政策と音楽教育関連教科

書について検討した。植民地朝鮮の教育制度は、2回にわたる学部令（1906・1908）と、4回にわたる朝鮮教育令（1911・1922・1938・1941一部改正）の制定、改正を経た。これらの学部令、朝鮮教育令に伴い、唱歌・音楽教育の目標と教育内容は時期ごとに変化した。基本的に普通学校では「唱歌」を、師範学校や高等学校などの中等教育機関では「音楽」が教授されることになっていたが、これらの教育は日本による韓国併合（1910）後から体系的に行われるようになった。初期段階では「唱歌」「音楽」教育において単音唱歌、複音唱歌や楽器使用法の教授が行われていたが、その後、時期ごとに行われる朝鮮教育令の改正に基づく当時の教育目標に合わせた形へと変化した。時代が下るにつれて、歌唱、発音、聴覚訓練、楽器指導、音楽鑑賞、音楽理論、音楽史など教科内容が増え、他科目との連携を重視するようになった。また、このような教育政策の変化に対応した音楽教科書が編纂されたことを指摘した。

第4章では、植民地朝鮮で刊行された教育雑誌『文教の朝鮮』と『朝鮮の教育研究』の唱歌・音楽関連記事、および1930年代から40年代にかけての時期に実際に初等教育を受けた朝鮮人へのインタビューと当時の朝鮮人児童の学習ノートの分析を通じて、朝鮮総督府の音楽教育政策が教育現場においてどのように適用されていたのかについて検討した。上記の両雑誌には、初等教育で使われている各学科目の教材に関する研究や新たな教授法の開発及び授業で使われる指導案の提供、師範学校教諭などによる唱歌・音楽教育に関する一考察や唱歌集編纂の趣旨、唱歌教育の経験などが掲載されている。両雑誌の記事の内容から、植民地朝鮮における唱歌・音楽教育内容が少しずつ発展する中で当時の教員たちが直面した困難さを知ることができ、そこから当時の唱歌・音楽教育の実態、具体的には教員の経験から生まれた唱歌教授法や唱歌・音楽教育の進展により具体化された難題に対する解決方法、朝鮮人児童の音楽環境について確認することができた。唱歌・音楽教育現場では、教員によって各時期に行われた音楽教育政策、いわゆる教育目標や要綱、方法（政策）に近づくような内容が教育されていたことを明らかにした。また、一部の事例に過ぎないものの、前述のインタビューと学習ノートの分析からは当時の音楽科目における朝鮮総督府の教育方針や要綱などが実際の音楽教育現場で実用化されていたことも明らかにした。

第5章では、これら初等教育を担う教員を育成した師範学校の音楽教員の活動に注目した。まず、師範学校音楽教員の履歴を取り上げ、当時の朝鮮における中等教員養成状況や日本人教員の待遇について明らかにし、次に京城師範学校音楽研究会編『初等唱歌』と師範学校音楽教員出身の五十嵐悌三郎・吉沢実・安藤芳亮共著『新制音楽要義』を分析し、日本人中等音楽教員による活動が植民地朝鮮における西洋音楽の受容にどのような役割を果たしたのかについて明らかにした。植民地朝鮮に移住し音楽活動を行った多くの日本人は、主に教育活動に従事しており、師範学校などの中等音楽教育機関に勤めていた。朝鮮に移住し教鞭を執っていた日本人教員は、帰国後の復職の保障、万一朝鮮で死亡した場合の遺族への保障が法律に定められ、併合以降は加俸給や退隠料も認められたことから日本

本土におけるよりも恵まれた勤務条件にあった。彼らは、前述の『初等唱歌』『新制音楽要義』の編纂、執筆を通じて、朝鮮総督府の教育政策の下で行われていた唱歌・音楽教育について問題意識を持ち、日本の植民地という制限された条件の中で、改善を模索していた。彼らの教育活動は、唱歌・音楽教育を通じて西洋音楽の受容に大きな役割を果たしたことを明らかにした。

第6章では、植民地期の朝鮮を短期間訪問し、音楽活動を行った日本人音楽家による音楽会について考察した。日本や世界を拠点に音楽活動を行った日本人音楽家が、朝鮮においても多くの音楽会を開き、活動を展開したことに注目し、その音楽会の実態や観客層を調べ、日本人音楽家による音楽会は朝鮮の音楽界においてどのような意味を持っていたのかについて考察した。その結果、日本人音楽家により行われたクラシック音楽会は一部の朝鮮人に受容されていたことが明らかになった。日本人音楽家によるクラシック音楽会は、中高等教育を受けた一部の人々に影響を与え、朝鮮にクラシック音楽文化が浸透するうえでも一定の貢献を果たしたことを明らかにした。

第7章では、戦時期の統治政策を反映した音楽文化構築において大きな役割を果たした朝鮮日本人音楽家に注目した。朝鮮の総力戦体制期において音楽にどのような役割が要求されたのか、この時期に様々な音楽組織を一元化して成立した朝鮮音楽協会の諸事業において朝鮮日本人音楽家がどのような役割を果たしたのか、また彼らの活動が当時の情勢とどのように関わっていたのか、といった点について考察した。朝鮮における総力戦体制期、特に国民精神総動員運動の開始以降、音楽には宣伝と皇道文化振興という役割が求められた。そのため、音楽を含む文化振興を目的に各文化機構の再編成や統合、新結成などが強化され、皇道文化普及の実践が図られた。朝鮮に移り住み音楽活動を行った日本人音楽家は、総力戦体制期に音楽家や音楽教員として活動し、朝鮮の楽壇の組織一元化となった朝鮮音楽協会において中軸的な役割を果たした。彼らが中軸となり行った各種音楽会や音楽競演大会、国民皆唱運動、音楽技芸資格認定試験などは、戦時期における統治政策を反映したものであり、それらによって戦時期独特の音楽文化が構築された。

以上の考察から、在朝鮮日本人中等音楽教員や日本人音楽家が植民地朝鮮において行った音楽活動の具体的な様相が明らかとなった。植民地朝鮮における彼らの音楽活動はこれまでほとんど論じられることがなかった。むろん、それが植民地支配という特殊な条件のもとでなされたという点には十分な注意を払う必要があるが、だがその一方で、彼らの音楽活動が日韓双方の音楽界を西洋音楽によって結びつけたことも事実である。彼らの音楽活動は、韓国における西洋音楽受容に大きな役割を果たしたのであり、その意味で、韓国西洋音楽受容史の一側面として無視することのできないものといえる。